
前を向いて

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前を向いて

【Zマーク】

Z6528R

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

彼女はいつだって難しい」と言つ。

今回だつて つて、え？

なんで目は前にあるかだつて？

『Smile Japan』と書いた方に参加させて頂きました。

「ねえ、どうして人には目が前にあるか知ってるかい？」

突然、何の前触れも、前振りも無く、隣に座る彼女はそう問い合わせてきた。

「……なんでなんだ？」

「それはね」

「……それは？」

「前を見るためなんだよ」

「知ってるよ！ そんな事はみんな知ってるよ！」

もつたいたぶられた割に普通の答えた。そもそも何故そんな事を問おうとしたのか自体が謎なレベルの普通さだ。

「ふう……本当にそう言えるかな？」

「言えるよ！」

「キミは今みんなと言ったんだよ。つまり地球上に住む約六十億人、そして宇宙のどこかにいるかもしれない宇宙人を含む人類の総意だと。それをどう証明するんだい？」

「証明って言われても……」

数学の証明すら、なんだそれな僕に証明を求めるか。最近母親が勝手に代えた照明に目を眩ませた僕に証明を求めるのか。

「ほら、無理だろ？」

「ちょっと待つてよ、それに宇宙人まで含めるの？ その宇宙人はちゃんと前に目があるんだろうね！」

「さあ？ それも証明してみるかね？」

「くつ……」

「無理だ。」

そもそも宇宙人がいるかどうかさえ僕には証明不可だ。昔、夜中に見つけた飛行機をUFOだと思い込んでいた程、そっち方面に疎い僕では宇宙人を探して、その上目の位置、そして目がある理由

まで聞くのは無理だ。それに僕は英語ですらろくに喋れないのに宇宙語なんてどうすればいいんだ？

『ワレワレハウチュウジンダ』とでも言えれば良いのか？

違うよなあ。

ああ、分かつてる。

『ワレワレハチキュウジンダ』だよな。

僕達地球人。君達宇宙人。

「……て、話しずれてない！？」

なんで『目が前にある理由』から『宇宙人との話し方』にまで飛躍してるんだ！？

「……多分だけど、その理由の半分はキミ自身だと思つよ」

「え、なんで？」

「自分の考えていた事を見直してみるとこいよ。どこからおかしくなったかわかるから」

復習は大事つて事か。そう言えば、中学の頃から予習復習は大事だつて、なんとかゼミが言つてたな。あんな漫画みたいにうまく行くとは到底思えないけど……て、おつといけない。危うく脱線して線路を見失うところだつた。

今は何故話が飛躍してしまったか考えるのが先だ。脱線なんてしている場合ではない。

「うーん……」

駄目だ。やっぱり分からぬ。

途中で『脱線つて脱臭炭に似てないか？』とか考えていたせいだろうか？

「まあ、難しい話は今は脱臭炭のように置いておくとしよう」

「何故脱臭炭が出てきたのかいささか疑問だけど、そうした方が良さそうだね」

「ああ、目は前を見る為にあることをみんなが知つてるかどうかだつたね」

「だいだいそんな感じ」

「あ、そうだ……！」

「ん、なんだい？」

「ふつふつふ……今こそ反撃の時だ」

「おや、やけに自信満々だね」

「それもそうだ。今までやられっぱなしだったが、今回までは問屋をおろさせない。

「目を前に見ること以外に何に使つて言つんだっ！」

「え、別に後ろも見れるけど？」

そう言つて彼女は、首を捻つて後ろを見る。ついでとばかりに左右まで。

あれ？

あれ、あれ？

何かおかしくないか？

先ほどまであんなに自信があつたのに、目の前の彼女はそれを身を持って証明した。でも、何か腑に落ちない。

何かが矛盾してるような気がするようなしないような。

「……て、前を見る為の目でどうして後ろが見れるんだよ…」

彼女自身がそう言つたのに、それを自ら否定したものだ。

「あれ、なんだい？ 目は前を見る為にあると全ての人気が知ってる

のではなかつたのかい？ 私は今後ろを見る為に目を使つたぞ」

「うつ……でも、それを言つたら、そつちも嘘を言つたことになる

じゃないか」

「いや、嘘は言つてないよ」

「いや言つてるって。矛盾してるって

「私は後ろを見ていても前を見ることができるんだよ」

「……はい？」

後ろを見ながら前を見る？

やっぱり矛盾している。それとも、まさかのどんちオチなんだろうか？

一休さんなんだろうか？

「私はね……例え後ろを向いていても、目が見えなくても、前を見ることが出来る。後ろなんてもう振り返らない、暗闇なんてすぐに抜け出してやる。そしてね、しつかり前を向いて生きていくの」

「はは……」

なるほど。

前向きに、てことか。

でも案外難しいんじゃないかな、それって
目があるだけで出来ることなのかな。

「出来るよ、だって」

彼女はそうやって僕の目をじっと見て、言う。

「キミがいる。そのことがわかるだけで私は前を向いて生きられる
ああ、今度こそ本當になるほど。
僕はわかったと答える代わりに、彼女の目をじっと見つめ返した。

(後書き)

これを見て、すこしでも笑っていただけたら、私も幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6528r/>

前を向いて

2011年10月6日10時44分発行